

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



池大雅《蘭亭曲水図屏風》(部分)
紙本着色
一五八・〇×三三八・〇cm
一七六三(宝暦三三)年
重要文化財

南画の大成者・池大雅が四一歳の時に描いた代表作。永和九年(五三五)三月三日、浙江省の蘭亭で王羲之が文士四人を集めて修禊を行った故事を描く。曲折した流水に杯を流して、自らの前を過ぎるうちに作詩をし、詩ができなければ罰として杯を空けるという風流な趣向を描くこの画題は、江戸時代を通じて好まれた。大雅の前にも狩野派の画家がよく手がけており、当館には、狩野永納、久隅守景の作品がある。大雅以前の「蘭亭曲水図」と比べると、本図は、画面いっぱい広がる岩山と曲水を俯瞰的にとらえ、その中に文士たちを描きこんでいる点の特徴であることが分かる。本図のように、自然景観のひろがりやを颯爽と描く「蘭亭曲水図」は、大雅以前にはなかった。鮮やかな淡彩、金泥のかがやきが、春のさわやかな空気と日差しを感じさせる傑作だ。

(主任学芸員 野田麻美)

※この作品は「徳川の平和」展に出品されます。

(四一五ページ参照)

No.
122
2016年度 | 夏 |

「徳川の平和展」——企画の本音

館長 芳賀 徹

「徳川の平和（パクス・トクガワナ）」
—二五〇年の美と叡智」展の開催がいよ
いよ近づいた。夏休み明けの九月十七日
（土）から十一月三日（文化の日）まで、
久能山東照宮にもほど近い私たちの美術
館で開かれる。

「パクス・トクガワナ」と言われても、
すぐにはピンと来ない方も多いかもしれ
ない。ごもつともだ。これは私自身が
まから五十年ほど前、一九六〇年代半ば
に、明治維新の研究からさかのぼって徳
川日本の歴史の豊かき、面白さにはじめ
て目覚めた頃、その緑なす平和列島の風
景を眺めやりながら思いついた言葉に他
ならないからである。

だいたい、徳川最初からすでに「元
和偃武」という幕政称讃の言葉があった。
初代將軍徳川家康が大坂夏の陣に勝利し
た元和元年（一六一五）から、二代秀忠、
三代家光にかけての約十年の元和年間
に、日本列島の天下取りの争乱は終息し、
武器は放棄されて（偃武）、待ちに待っ
た天下泰平が再来したとのよろこびの表
現である。その後も島原の乱（一六三七

年〜三八八）などの事件はあったが、最
幕末の戊辰戦争に至るまでこの島国の内
外には武力による戦争というものが一切
なかった。元禄頃の人々はその永続平和
を指して「御静謐」と呼び、「四海波静か」
と讃えた。そして十八世紀後半の京の詩
人と謝蕪村ともなれば、いつ果てるとも
知れぬこの鎖国平和の物憂さをとらえ
て、「春の海ひねもすのたり〜哉」「高
麗船のよらで過ゆく霞かな」と詠んだの
である。

「極東」の洋上に浮かぶこの列島を満
たしていた「徳川の平和」——それを私は
元和年間より少しさかのぼって家康によ
る江戸開府（慶長八年「一六〇三」）から、
ペリーの黒船艦隊の江戸湾来航（嘉永六
年「一八五三」）までの二五〇年間と見
立てるのだが、そこにはもちろん西洋史
上の「ローマの平和（Pax Romana）」
への連想があった。古代ローマでは、カ
エサルの後を継いで初代皇帝となったア
ウグストゥス（紀元前六三年〜紀元十四
年）以来、広大な版図の内外に政治の安
定を計り、その平和の下に学藝も大いに

築えた約二〇〇年の歴史があったし、十
九世紀になると英国が他国に先駆ける産
業の力と軍事力によって世界の「七つの
海」をその強権下に収めたとき、これを
ローマの先例に倣って「英国の平和（Pax
Britannica）」と呼んだのである。第二
次大戦後には代わってアメリカがその強
大な勢力圏内に「Pax Americana」を築
きもした。

これらの西洋側の例に比べれば、「Pax
Tokugawana」はいかにもスケールが小
さい。しかし規模がコンパクト（緊密）で
あったからこそ、平和は民衆の日常生活
の中にまで濃密にゆきわたり、またそれ
ゆえに世界史上稀な長期に及ぶこともで
きた。それもおのずから平和な時代にな
ったなどというのではない。家康以来の
歴代の中央政府（幕府）の為政者たちの
工夫によって構築され改良され、三百に
近い諸藩の武士階級という地方行政官た
ちの不断の努力によって維持され、大多
数の都市農漁村の民衆によって享受され
支持された平和の体制だったのである。
「徳川の平和」二五〇年の歴史は、「平和」

が促す文化と文化が保証する「平和」と
いう相互作用の、絶好の実験観察室であ
ったとも言えるのではなからうか。

今回の展覧会は単なる江戸美術名作展
ではない。「徳川の平和」の現実と理想が、
これらの絵画作品の中にどのように映し
だされているかをじっくりと読みとつて
頂こうという企画なのである。英一蝶の
『雨宿図屏風』や久隅守景の『夕顔棚納
涼図』を隅々まで愉しんで頂きたい。そ
の上で、戦前戦後の進歩派史家たちの思
い上がりによって、「夜明け前」の封建
制の暗闇の中で、ただ地べたを這って生
きていたとされた徳川民衆を、その暗黒
史観から救い出し、愚民観から済度して
やって頂きたい。館長としてはそのこと
をこそ願うのである。



久隅守景《納涼図屏風》（部分）（東京国立博物館）国宝 後期展示
Image: TNM Image Archives

大雅 VS 蕪村 — 徳川の平和展によせて —

河野元昭

京都美術工芸大学学長

措いてほかにない。

現在はMIHO MUSEUMの至宝となっている「山水図屏風」を、私が歴史ある美術雑誌『國華』にぜひ紹介したいと思ったのも、月光を思わせる銀地の微光感覚に魅入られたためだった。それは辞世の句「白梅に明るる夜ばかりとなりにけり」に象徴されている。

これに対して大雅は陽光の画家だった。代表作である「楼閣山水図屏風」は、陽光をイメージさせる金地に描かれている。蕪村の微光感覚と対極をなしている。俳諧師蕪村に対し、大雅は漢詩人だったのだが、その詩はきらめくような光と色彩に彩られている。このような大雅が私も嫌いではない。しかし、微光感覚を身にまとう蕪村の方が何となく愛おしく感じられるのは、やはり私がウエットな人間だからかもしれない！

日本文人画の双璧は池大雅と与謝蕪村である。もちろん私が決めたものではない。昔からそう決まっていたのである。おそらく二人が生きていた時から、そう見なされていたのであろう。安永四年（一七七五）版『平安人物志』を見ると、画家のトップは円山応挙である。今年生誕三〇〇年を迎えて特別展が開かれ、ブーム、いや、一大社会現象となった伊藤若冲がこれに次ぎ、続いて大雅と蕪村が登場する。

応挙は写生派、若冲は奇想派に位置づけられているから、文人画に限れば、大雅と蕪村が双璧ということになる。しかしこのようなランク付けを決定的にしたのは、田能村竹田であろう。竹田は大雅・蕪村に続く第三世代を代表する文人画家だが、画論家としてもすぐれ、『山中人饒舌』という名画論を遺してくれた。

そのなかに、大雅は正にして譎ならず、蕪村は譎にして正ならずという、有名な大雅・蕪村比較論がある。高校時代、私は竹谷長二郎先生に漢文を習ったが、後年先生は『山中人饒舌』に評釈と現代語訳を加えて『竹田画論』を出版された。

それによれば、正譎という比較は、『論語』憲問篇に出るもので、一般的には公正と不正を意味している。

しかし『山中人饒舌』においては、正を「正々堂々」とした正攻法、譎を「奇変百出」たる奇襲攻撃とする、荻生徂徠の兵法に関する比較論を援用して解釈するのがよいという。私の先生だからというわけではないが、実に正鶴を射るものだと思う。

日本文人画の特徴として、南宗画のほかに、さまざまな様式を自由に摂取する雑食性がある。大雅も例外ではないのだが、蕪村はさらに自由奔放である上、文人画の故郷ともいべき中国にはあるはずもない俳画にまで触手を伸ばしている。このような蕪村の作画態度を、竹田は譎と言ったのであり、けっして間違っているとは非難したのではない。だからこそ竹田は、「それでいてともに同時代の第一人者の位置を占めるライバルだ」と結んでいるのである。

それにもかかわらず、最終的に竹田は、「近ごろ大雅・蕪村の二翁を並べて称す

るが、これはよくない」と結論を下すことになる。つまり、蕪村は大雅に及ばないと言っているのである。真の文人画家たらんとした竹田にとつて、中国南宗画を軌範とする古典主義の立場から完全に自由になることは、生易しいことではなかったであろう。あの個性際立つ浦上玉堂と親しく、またその絵画世界を高く評価していた竹田であったが、一世代前の先輩画家には、やはりオーソドックスな美を求めずにはいらなかったのかもしれない。

このような竹田の立場を考えれば、現代の私たちは、竹田の大雅・蕪村優劣論にとらわれる必要など毛頭ないことになる。事実、現代では蕪村を愛する人の方が多いように思われる。私もその一人だ。とくに惹かれるのは、蕪村作品を貫いて流れる微妙な光の表現で、これを微光感覚と呼んだことがある。三大横物とたたえられる「峨嵋露頂図」「富岳列松図」「夜色楼台図」を一人の個性に帰着せしめるのは、微光感覚を



与謝蕪村《山水図屏風》(右隻) MIHO MUSEUM所蔵



池大雅《楼閣山水図屏風》(右隻) 東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives

開館30周年記念展

徳川の平和
(パクス・トクガワーナ)
—250年の美と叡智—

平成28年9月17日(土)～11月3日(木・祝)

前期：9月17日(土)～10月10日(月・祝)

後期：10月12日(水)～11月3日(木・祝)

開館三〇周年を迎えた当館の秋は、昨今人気の高い江戸絵画の名品・傑作を一堂に集めた「徳川の平和」展で、皆様をお迎えします。

一七世紀初めから一九世紀半ばにかけての日本では、徳川將軍家の治世の下、世界史上稀にみる、二五〇年もの長きに及ぶ天下泰平の世が続きました。現在、「江戸時代」と呼ばれる徳川の平和な世においては、さまざまな画家が活躍し、数多くの

傑作、個性きわだつ作品が生み出されました。

徳川の世のはじめには、「画壇の家康」とも称される狩野探幽(一六〇二～一六七四)の登場により、日本絵画史は大きく転換し、御用絵師の制度の確立とともに、將軍家などの御用を勤めた探幽以下、江戸狩野派の画風が全国に広まりました。

しかしながら、徳川の世にきらめいた画家は、一八世紀に数多く輩出され、とりわけ民間画壇において、個性きわだつ画家たちが活躍しました。いわゆる「鎖国」体制下にもかかわらず、高まった異国への関心から、池大雅(一七二三～一七七六)・与謝蕪村(一七一六～一七八四)といった巨匠が、明清時代の中国絵画の感化を受けて、日本における文人画のスタイル(南画)を確立しました。また、西洋画の影響を受けて描かれた洋風画のような新しい絵画のスタイルが現れたことも、重要な出来事だったといえます。

やがて、一九世紀、幕末に至ると、「徳川の平和」が揺らぎ出し、渡辺



図1 狩野探幽《松に孔雀図》(元離宮二条城事務所) 重要文化財

崑山(一七九三～一八四一)などによって、近代に先駆ける様々な探究が絵画においても行われます。

「徳川の平和」展では、駿府で最期を迎えた徳川家康没後四〇〇年を記念して、以上に触れた画家をはじめとする巨匠の作品を中心に、「徳川の平和」がもたらした奥行き深い豊かな美の世界を、一〇〇点余りの名品・傑作によってご覧いただきます。

「徳川の平和」展について、やや堅苦しい概要の話をしました。本展

のみどころについて、ここでは三つご紹介したいと思います。

まずは、何といっても、狩野探幽《松に孔雀図》(元離宮二条城事務所 重要文化財 図1)をはじめとする、光かがやく障壁画や屏風の傑作・大作が一堂に会することです。久隅守景の《納涼図屏風》(東京国立博物館 国宝、後期展示 図2)のような、「徳川の平和」を一点で語ることもできるような名品、あるいは、池大雅の《柳下童子図屏風》(京都府 重要文化財 前期展示 図3)、与謝蕪村の《奥の細道図》(京都国立博物館 重要文化財)といった、一八世紀の絵画史を語るうえで外せ



図2 久隅守景《納涼図屏風》(東京国立博物館) 国宝 後期展示
Image:TNM Image Archives

ない大作、そして、渡辺崋山《一掃百態図》（田原市博物館 重要文化財）など、一〇点余りの国宝・重要文化財が集結し、会場を彩ります。

次に、江戸絵画の魅力をグッと凝縮したポリウムと構成に注目いただきたいと思います。五〇名以上の



図3 池大雅《柳下童子図屏風》（京都府）重要文化財 前期展示

画家たちによって描かれた約一〇〇点の作品を、ゆるやかな時代順の枠組みを設けてご案内します。一七世紀初頭から一九世紀半ばまで、実に二五〇年の長きにわたる徳川の世を通覧いただけるような工夫をしておりますので、初めてご覧になる方も、すでに江戸絵画通の方にも、楽しんでいただけること間違いなしです。

最後に、初公開作品をご紹介します。江戸絵画研究の最前線の一端に触れていただけることです。この展覧会の準備で調べた江戸狩野派の作品について、現在、一三〇〇図を超える情報のデータベースをすすめておりますが、その中のいくつかの作品について、ご所蔵者のご協力により、展覧会で初めて公開させていただけることとなりました。たとえば、狩野安信ほか合作《名画集》（個人蔵 図4）は、徳川家関連の作品である可能性が高い名品で、当時、脂の乗り切っていた江戸狩野派のトップ・狩野安信（一六一四〜一六八五）以下、江戸狩野派を引っ張っていた中心画家の合作による、八〇図から成る豪

華極まりない画帖です。また、本展図録の論文では、調査研究した内容についてもご紹介させていただく予定です。江戸絵画通への道を究めた一方の道案内となれば幸いです。

なお、ここでは、何度か「江戸絵画」という、現在展覧会などでよく使われ、皆様の間で定着している言葉によって展覧会をご紹介しましたが、当館の芳賀徹館長によれば、「徳川時代」の絵画は、「徳川絵画」と呼ぶべきもの！とのこと。パクス・トクガワナ（徳川の平和）という呼称を提唱した芳賀館長の想いは、



図4 狩野安信ほか合作《名画集》（個人蔵）（部分）

会場で、そして図録で熱く語られることでしょう。この展覧会が、「徳川の世」の平和が生んだ絵画の素晴らしさを改めて検証し、さらには、その時代性や特色を明らかにする機会となることを願っています。

今年は、伊藤若冲（一七一六〜一八〇〇）生誕三〇〇周年などの話題で江戸絵画の展覧会が人気を博していますが、近年の傾向としては、一人の画家を特集する展覧会、とりわけ、個性的な画家の展覧会が数多く開催されています。ところが、「徳川の平和」展は、江戸絵画を通覧し、その多彩で豊かな美の世界を味わっていただくという、実に贅沢で、欲張りな展覧会です。

はじめて江戸絵画に触れる方も、もつと江戸絵画を知りたい方も。江戸絵画史を通覧することで、その魅力を堪能できる会場に、是非お運びください。（主任学芸員 野田麻美）

※展覧会の出品作品は、前後期で作品がほぼすべて入れ替わります。

お目当ての作品がありましたら、展示期間のご確認をお願いいたします。

「江戸天下祭図屏風」研究事始め

当館学芸部長 泉 万里

はじめに

この秋、当館では、「徳川の平和 二五〇年の美と叡智」展を開催する。重要な江戸時代絵画の数々をご紹介するが、そのひとつが当代祭礼図の屈指の名品「江戸天下祭図屏風」（六曲一双・個人蔵）である。描かれているのは、江戸城内の大名屋敷の間を巡る山王社の祭礼行列。同社は、家康によって徳川氏の産土神とされ、祭礼行列は特別に許されて城内を通りぬけ、將軍の上覧を得ることもあった。十七世紀後半には、神田明神祭礼も同様の扱いを受け、徳川の平和を誇示する両祭は「天下祭」、「御用祭」ともいわれてきた。

本図は昭和初期まで、京都の本圀寺の所蔵品であったが、いつしか寺外へ流出し、行方不明になっていた。それが発見されて



図1 江戸天下祭図屏風 右隻部分 神輿を見送る人々

「国華」に特集号（二二三七号）が組まれたのは一九九八年である。榊原悟氏ほか二名の寄稿により、以下のようなことが明らかにされた。

画中に明暦三年（一六五七）正月の大火で焼亡した江戸城天守がみえ、絵画の様式も十七世紀半ば頃と推測されることから、景観年代、制作時期ともに明暦二年頃と絞られる。そして、大名屋敷のなかでひとときわ目立つのが紀州徳川家であり、そこに貼られた札には、他の屋敷と異なり、家名を書かずに「上やしき」とのみ記入されていることから、同家ゆかりの人々が、本図の制作や受容に関わっているのだろうと推測された。

この特集号刊行後も研究は重ねられ、二〇〇三年には見落とされていた先行研究の存在が八反裕太郎氏によって指摘された（1）。それは、昭和七年（一九三二）の「史



図2 江戸天下祭図屏風 左隻部分 仮装行列

蹟と古美術」第九卷第三、四号の記事である。早くもこの時点で制作時期を明暦二年とし、水戸光圀が寄進した屏風であるという寺伝も紹介されている。その寺伝から八反氏は本図の制作背景の解明を試みる。

二〇一〇年には、黒田日出男著『江戸図屏風の謎を解く』（角川学芸出版）が上梓された。黒田氏は本圀寺伝来といわれてきたことに注目し、寺と紀伊徳川家の関係から本図の制作事情を推測する。

このように、前者では寺伝が、後者では伝来が、最近の研究の立脚点となっている。しかし、寺伝や伝来ほどの程度信頼できる情報なのだろうか。

寺伝と伝来

八反氏が指摘した「史蹟と古美術」誌を確認しよう。この雑誌は栗野秀穂氏主宰国史普及会史蹟踏査部の会報のようなもので、同会が昭和七年十月に計画した本圀寺調査の「葉」が九月の第三号に、見学後の報告が翌月の第四号に収録されている。

葉には「厩図屏風 二枚折一双」、「平家物語屏風（中略）六曲一双」とともに「山王祭屏風 一双」も見学できると報じられ、当時、本図は「山王祭屏風」と呼ばれていたとわかる。そして、三点のうち本図のみ解説があり、制作時期を明暦二年頃とし、「本寺の伝によれば徳川光圀公の母堂病に臥し山王祭を見られぬことを嘆いたので、母の為にこの図を画かしたのが成らぬうちに逝去したといふ」と寺伝を紹介する。

つづく第四号には、西堀二三氏の論文「山王祭屏風について」が掲載され、そこでも「この絵の筆者は狩野探幽と伝へ、又寺伝によれば光圀の母が病氣に罹り祭を見る能はざりしためにその景況を画師に描かしめたが、不幸にして早く病没せるため之をその婦依寺に寄進せるものであると云ふ」と、水戸光圀が母のために画師（探幽）に描かせ、母没後に本圀寺に寄進した屏風であるという同寺に伝わる逸話を紹介する。しかし、「されど今この画を検すれば明暦炎上以前の江戸城の天主が画かれ、画中人物の付箋によるもこの祭が明暦二年のものを画けるものなることを知られ、光圀の母の死が寛文に下る事を思へば、吾々はこの所伝を離れて別に徳川初期に於ける一般祭礼屏風なるものものも意義を思考せざるべからざるものとなる」と、この寺伝に疑いを挟む。

ところ、あらためて調べると、寺伝にも触れる作品解説は、じつは、この「史蹟と古美術」の記事が最初ではない。それよりも早い昭和三年（一九二八）刊行の東京帝国大学文学部史料編纂掛編刊『第十三回史料展覧会列品目録』に認められる。この展覧会に本圀寺所蔵「山王祭屏風」が陳列され、その目録に、上述の「国華」特集号および「史蹟と古美術」の解説内容を取引する、簡にして要を得た解説が掲載されていることを報告しておきたい。

そこでは、景観年代と制作時期を明暦二年とみさだめ「上やしき」とあるは、紀州家の邸宅たること、これに並びて尾張家水戸

家のあるによりて明なり、この屏風伝へて、水戸光圀より本圀寺に寄せたるものなりといふといへども、この図に紀州家を顕著にせるより推せば、もと紀州頼宣の描かしめしものならんか」と結ぶ。寺伝の信憑性はここでも疑われ、紀伊徳川家に焦点が絞られている。このように、光圀を本圀寺と関わらせる寺伝は、そこから推論をたてうるほどの強度を持ち合わせていないようだ。

つづいて伝来である。本図が本圀寺にあることを確認できるのは大正八年（一九一九）同寺発行『大本山本圀寺記念写真帖』が早い⁽³⁾。左隻の写真が、「探幽神田祭屏風」として、「元信耕作之屏風」、「光琳菊之屏風」とともに収録されている。なぜか

作品名が神田祭とされている。同種の写真帖は昭和三年にも刊行され、おなじく「探幽の筆、神田祭」として収録される。そして、あらたに「屏風 元信の筆、八島戦争」、「同 光信の筆、馬屋」を追加する。「馬屋」は現在も本圀寺に残る「厩図屏風」二曲一双だが、ほかは所在不明である。

さらに、江戸時代に出された名所記類の本圀寺の項目を通覧すると、唯一、秋里籬高撰『都林泉名勝図会』（一七九九年刊）が本圀寺の什宝として屏風を紹介している。そこでは「耕作の画の屏風狩野古法眼の筆。繋ぎ馬の二枚屏風は岩佐又兵衛の筆」の二点を取り上げられ、それぞれ写真帖掲載の「元信耕作之屏風」と「馬屋屏風」と推測でき、少なくともこの二点は十八世紀に本圀寺にあったとわかるが、残念ながら

本図については確認がとれない。

このように、あらためて調べれば、本圀寺にはいつた時期も経緯もまったく不明なのである。付け加えれば、誤植かもしれないが、写真帖で「神田祭屏風」とされていたことも気になる。「本圀寺伝来」という言い方は、屏風が長らく同寺にあって、主題内容も理解され、尊重されてきたという印象を与えるが、そうであれば、こうした誤りは見過ごされなかったのではなからうか。

おわりに

寺伝や伝来には、それを伝えてきた人々の思いが反映し、それを掬いとること自体、受容史の研究となる。しかし、検証しきれない寺伝や伝来を足がかりに、作品の制作時期や制作意図を追求することには慎重でありたい。

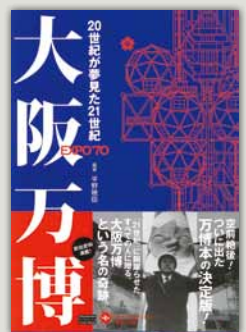
昭和三年の史料編纂掛作成の解説と、それを最新の知見で補強した「国華」特集号の結論が、本図を考えていくためのストーリーラインであることを確認して、稿を閉じたい。

注

(1) 八反裕太郎「天下祭・祇園祭図屏風」について『芸能史研究』一六一号 六五、六六、七三頁 二〇〇三年

(2) この解説は昭和十年刊行の『麹町区史』に引用される。口絵、「例言十則」。

(3) 二冊の写真帖は伊藤瑞叔編『正嫡付法（中巻）本圀寺史料』（昌柏寺華林山文庫求法院学室刊 一九九一年）に収録。



本の窓

平野暁臣編著
『大阪万博』
—二十世紀が夢見た二十一世紀—
小学館クリエイティブ 二〇一四年

今春、開館三〇周年記念展「東西の絶景」に出品した、今井俊満（東方の光）は、もとは大阪万博、富士グループ・パピリオンのVIP室を飾る壁画として制作された、横六メートルもある、巨大な絵画だ。筆者は、母親の胎内で、大阪万博を経験したため、筆者の万博イメージは、物心ついてから見聞きた、家族の会話や、テレビの映像で形作られてきたが、資料満載の本書からは、大阪万博が、いかに壮大な催しだったのが、具体的な写真、文字資料、データからよくわかる。富士グループパピリオンは、コルビュジエ最後の弟子と言われた村田豊が設計した、幌馬車のような、バルーン構造の建物であった。プロデューサーを務めたのは川添浩史。画家の今井俊満が、当時、川添が妻の梶子とともに、東京六本木で営んでいた、イタリアンレストラン「キャンティ」の常連客であったことは、別書、野地秩嘉著『キャンティ物語』（幻冬舎）に詳しい。二冊、合わせて読むと、作品が制作された時代が、透けて見える。

（上席学芸員 川谷承子）

五年間お世話になりました

静岡県文化・観光部総務企画課 横畑朋之

総務課の職員として五年間を過ごした美術館を離れて、早いものでもう二ヶ月が過ぎました。

私が美術館に異動となったのは、ちょうど開館二十五周年を迎える平成二十三年四月のことでした。それから五年間、美術館ではさまざまな貴重な経験、新しい体験などをさせていただきました。

中でも一番印象に残っているのは、やはり平成二十四年度に開催した企画展「インカ帝国展」です。会期中、十万人近い入場者を集め、美術館の内外ともに大変な混雑となりました。美術館職員総出でその対応に当たり、大変だったなど



最優秀賞受賞後の懇親会於：県庁別館20階レストラン（右から三番目が筆者）

いう記憶とともに、充実感が残っています。また、異動直前の今年三月、「ロダンウィーク」の取り組みで、県の「ひとり一改革運動」最優秀賞を受賞できたことも貴重な経験であり、よい思い出です。

美術館職員として働いていたときは、違い、今の自分は「外」から美術館を見る立場となりました。外側に出ると、「美術館で何をやっているのか」が急に見えにくくなります。やはり「広報」の重要性というものを強く感じます。特に、美術にあまり関心がない方々や、県立美術館に一度も行ったことがない、いわゆる「未・来館者」の皆さんに県立美術館へ足を向けてもらうことは、本当に難しいことだと感じます。（以前から感じていたことではありませんが）

来館者数だけが、美術館評価のポイントではないとは思いますが、やはり県立美術館は多くのお客様で賑わってほしいと思っています。

美術館から転出した途端、外から目線になってしまいました。今も県立美術館と同じ文化・観光部の職員です。これからも、家族と一緒に顔を出したいと思えますので、よろしくお祈りします。（ロダンウィークも楽しみにしております！）

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日（月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館）
夜間開館：7月23日(土)、30日(土)、8月6日(土)、13日(土)、20日(土)、27日(土)
10:00～19:00(展示室への入室は18:30まで)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静岡バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静岡「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

30th ANNIVERSARY

つながる、次へ

館内実技室を中心に行っている教育普及活動のご紹介

いろんな素材をいろんなカタチに！
わくわくアトリエ〈要予約〉

モダンアート 7月24日(日)
切り絵 9月19日(月・祝)
木材工作 12月11日(日)
写真 2月 5日(日)

時間 10:00～16:00程度
(1日1回または2回開催)

対象 小学生から大人まで



小学生3年生以下は親子でご参加ください。
参加費として、材料を実費で購入していただきます。
大人の方は観覧料が必要になる場合があります。

ケンピで夏の思い出をつくろう！
夏休み子どもワークショップ〈要予約〉

夏休みの美術館で学校ではできないアート体験

8月 9日(火) 8月10日(水)
8月11日(木・祝) 8月12日(金)

対象 小学生

詳細は1ヶ月前を目処にHP、
チラシでご案内いたします。



お問い合わせ
静岡県立美術館 学芸課 普及スタッフ 実技室担当
Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。